『無者キリスト』を読む　（新宿集会にて）

第五相「担い・抱き」（サマリヤ人）

――第二部　人間の福音的実存七相――

２０２３年10月29日
弘野慶次郎

喜んで生きる　第五相「担い・抱き」　サマリヤ人　永遠の生命の問題　身証こそが問題　信即行　愛の生命、無的実存　サマリヤ人の譬話の構造　隣人愛　人間愛の回復　サマリヤ人の心
わがサマリヤ人、イエスよ　隣人のなかにキリストが　愛のない人は人間でない

●喜んで生きる

お早うございます。この「サマリヤ人」は『曠野の愛』（36号、１９６１年晩秋号）に載っていたんですね。小池辰雄の57歳のとき、その時代に書かれたわけですね。

今日は、人間の福音的実存七相のうちの第五相「担い・抱き」（224頁）です。

その前に、この前どういうことを学んだかということをちょっと言っておきますと、「真の葡萄の樹」を学んで、

「その本体は神さまの方にあって、我々は影にすぎない」

ということを考えると、本ものの信仰も、本当の愛も、本当の生命も、義も、真理も、道も、希望も、そういうものは全部、我々が見ているものは影にすぎないということです。

「本体はキリストなんです。本ものが来たのがキリストですよ」

と。だから、僕らが食べるパンも、あれは本ものではないと。

「本ものの真（まこと）のパンは、生命のパンはキリストです」

というようなことです。「真の水」「真の生命」ということも学んだと思います。そして、

「私たちは本ものの生命のところに導かれて行くんだ」

というようなことが小池辰雄によって再認識されたということです。だから、パウロも

「だんだんと本ものの人間にされていく」

ということを、

「日々に新（あらた）なり」

「毎日毎日が日々に新なり」

ということを言ってます。そして、

「ついに終わりの日には、我々は神の子、光の子とされて、本当の人間としてやっていけるんだ」

というようなことになります。そういうことをこないだ学びました。

今、世界がまたイスラエルとパレスチナとの問題もありますし、それからロシアとウクライナの戦争もあります。それがずっと続いていますけれども、キリストが来られたから魔法のように平和が来るというのではない。一人ひとりの中にキリストが宿って、その人が証していくというようなことなんです。我々がどんなふうな生き方をしていたかということが、我々が死んだ後で孫たちに、あるいは曾孫たちに、

「あのお祖母ちゃんが、あの祖父ちゃんが、どうなふうな生き方をしていたか」

ということが、ある歳になってすっと分かってくれたら、もうそれが言葉でつながらなくとも、

「ああ、あの存在が、あのように喜んで生きていたのはどういうことか」

ということが分かってくれたら、もうそれはしめたものです。我々はやはり自分の生き方が、そういうふうな喜んで生きるということが、伝わるものだと僕は思っていますので、今ここにそういう孫が来られなくても、僕らが死んでからでもいい、僕らが天国に行ってからでも、神さまは絶対放っておかれないと思います。

「我々がどんなに喜んで生きているか、素晴らしい生き方をキリストによって与えられたか」

ということを、本当に身をもって毎日毎日を生きていかないと、それは子どもにも孫にも伝わらないと思います。人生というのはいろいろなことがあります。戦争もありますし、災害もあります。けれども、その中でも

「どうして我々が喜んで生きているか、どんなに世界が終わりになっても喜んで生きているか」

ということがやはり人に伝わることだと思いますので、是非とも一人ひとりが小池辰雄から学んだ本当のこの神髄を――十字架と復活と聖霊という生命を――どんなふうに生きていくかということで、我々はこうして学ぶ機会を持っているということです。それを僕は感じました。

●第五相「担い・抱き」　サマリヤ人

そうしたらば、いつものようにまた読みながら、学んでいきたいと思います。

《第五相「担い・抱き」サマリヤ人（ルカ10・25～37）

本文　ルカ福音書第10章

[25]すると見よ、ある律法学者が立ちあがり、彼を試して言うには、「先生、何をしたら永遠の生命が嗣げるでしょう」[26]そこで彼はこの者に言った、「律法には何と書いてあるのですか。どうあなたは読みなさるか」[27]この者は答えて言った、「『主なるあなたの神を、心一杯に、魂をこめ、全力を尽し、念いを専らにして愛せよ、そして隣人を自分のように愛せよ』とあります」[28]彼は

この者に言った「よく答えなさった、そのように実行しなさい、そしたらいのちが得られますぞ」29するとこの者は自己義認をしようと思ってイエスに言った、「ところでわたしの隣人というのはだれのことですか」30これを受けとめてイエスは語った、「ある人がエルサレムからエリコにくだっていった。すると強盗どもが彼を襲い、その着物をはぎとり、おまけに傷を負わせ、半殺しにしたままで逃げ去ったのです。31するとたまたまある祭司がその街道を降りて来たが、この人を見ると向う側によけて過ぎ去ったのです。32また同様に、レビ人もこの場所にさしかかってきたが、この人を見ると向う側によけて過ぎ去ってしまったのです。33ところがまたあるサマリヤ人が旅をしてこの人のところにさしかかったのですが、彼を見ると気の毒におもい、34近よってその傷にオリーブ油と葡萄酒とをそそいで包帯をしてやり、彼を自分の家畜にのせて、とある宿屋に伴れてゆき、介抱した。35そして翌朝出がけに、デナリ二つをとりだして宿屋の主人に手渡して彼にこう言ったのです、『あの人を看てやってください。費用が余計にかかったら、私が帰りがけに、あんたにはらいますよ』と。36さてそういうわけだが、これらの三人のうちで一体誰が強盗どもに襲われた人の隣人となったとあなたは思うのですか」37彼は言った、「その人にあわれみ深い行いをした人です」そこで彼にイエスは言った、「さあ行って、あなたも同じように実行しなさい！」」（私訳）》

もの凄く分かりやすい譬話をイエスがなさったけれども、この背景の「サマリヤ人」というのは、ユダヤ人からは嫌われていた民なんです。ここに出てくる「律法学者」とか「祭司」とか「レビ人」、この人たちはユダヤの中心的な指導者、宗教的な指導者だった。

「そのユダヤ人はサマリヤ人を軽蔑していた」

ということですけれども、その軽蔑していたサマリヤ人が善いことをやったということで、まぁ言ってみたら、イエスの皮肉みたなものがここに書かれているわけです。

「『主なるあなたの神を、心一杯に、魂をこめ、全力を尽し、念いを専らにして愛せよ、そして隣人を自分のように愛せよ』」

と。こんなことは凄いことですよね。

「心を尽くし、精神を尽くし、念いを尽くして、全生涯を尽くして、神を愛せよ」

ということでしょ。そして、

「自分と同じように隣人も愛せよ」

ということですから、こんなことは人間にできるはずがないわけです。けれども、これが最も凄い律法の中の訓戒なんです。それを答えたわけです。イエスにとっては、この律法学者に対して、

「その通りしなさい」

ということを言うわけですけれども、考えてみたら、イエスは人にそういうことができるということは思っておられなかったと思う。だからこそ十字架にかかられた。律法学者がとにかく問答でイエスをやっつけようという魂胆があるから、厳しいことを言われた。

「この譬話のようにあなたもやりなさい」

ということを命ずるわけです。とにかく、

「行動することが永遠の生命につながっていくんだ」

というようなことをここで仰っているわけです。イエスのここの

「主なるあなたの神を、心一杯に、魂をこめ、全力を尽し、とにかく愛しなさい。そして隣人を自分のように愛しなさい」

という言葉は本当に根源的な言葉なんですけれども、キリストの言葉はどれもこれも人間の実行不可能な言葉ばかりですね。例えば、

「敵を愛せよ」

とか、

「一粒の麦は死なずばそのままだけれども、死んだら多くの実を結ぶ」

とか、これはイエス自身が仰っているけれども、そういう「敵を愛せよ」とかいう言葉でさえも、我々にできるわけがない。「敵を愛す」なんて、とんでもないですよ。そういうことができないけれども、ここに律法学者がこういう問をしたので、

「お前もそのようにしなさい。自分の力でしなさい。そういう問をするんだったら、自分の力でそういうことをしなさいよ」

と、イエスが言われたわけです。

「やれるものならやってみろ」

というような意味ですよ。

「できないのに、お前はよくスラスラと優等生みたいな答えをしたものだな」

という皮肉がこもっていると思う。実際はできないのに、口先だけでそういうことを言っているということを、この問答の裏にそういう思いが隠れています。

●永遠の生命の問題

そういうことで、その次に小池辰雄がずっと解釈してくれています。

《永遠の生命の問題

イエスは故里のガリラヤ地方からいよいよ

「エルサレムへ行こうと決意して顔をしかとすえて」（ルカ9・51）

地上最後の旅の途上にあった。あるところで、多分イエスのはなしのあとで、律法学者が高慢ちきな様子で起ちあがり、学には素人であるイエスを試そうという魂胆で質

問を投げた。しかも表面は一応敬意を表するかの口調で、

「先生、何をしたら、永遠の生命が嗣げるでしょう」（ルカ10・25）

我らはまずこの問の性質について考えてみよう。ユダヤ人が人生問題の究極として「永遠の生命」を問題としているのは、人間の根源的要求を課題としている点において、ねらいはまことによい。

同じエルサレムへの途上で、ある金持の青年も、

「善い先生、永遠の生命を嗣ぐために、私は何をしたらいいですか」（マルコ10・17）

と問うている。両君とも「永遠の生命」を思弁的な問題としてはとりあつかわず、実践的な問題として「何をなすべきか」と設問している。ギリシア人であったら、「永遠の生命」とは「何か」と思弁・認識の問題として考えるであろう。しかしユダヤ人は実存の問題としてとりあつかう。ここに知的な傾向のギリシア人と、意志的、倫理的傾向のユダヤ人との人生に対する態度の、また思惟様式の相異を見ることができる。

そして聖書の真理の性格は、神の認識の問題ではなく、神に対していかに行動すべきかの実存の問題である。啓示の神に対する関係と態度の問題である。》

ここでも小池辰雄は

「実践こそが重要だ」

ということを言っている。ユダヤ人にとっては実践こそが問題であるから、こういう

「なにをしたら、永遠の生命を継げるのか？」

と問う。ギリシヤ人だったら、これは観念的に考えるだろうと言っている。

そしたら、日本人はどうかということですね。このユダヤ人やギリシヤ人は他民族ですから。

我々日本人はどうなのか。我々日本人は、「永遠の生命」はどうなんですかね。仏教なんかで、「極楽」とかいいますよね。みんな、死んだらどんなふうになるのかということを、僕ら以外の仏教徒はどう考えているのか。僕も仏教徒の家に育ちましたので、親鸞の流れのところで過ごしましたから、毎月毎月、命日の日にお坊さんが来て拝むわけです。そういうところで僕は育ちましたけれども。そういう仏教徒たちは、

「死んだら、いい所に行きなさい、極楽に行きなさいよ」

とか言います。それが我々の日本人の考えですよ。僕は思うのに、極楽というのはもの凄いスタティックな、静的な静かな感じがしますよね。蓮の上でいい所に行って、

「永遠に安らかに眠ってください」

とか言うでしょ、みんな。「安らかに永遠に眠ってください」と日本人は平気で言いますよね。けれどもキリスト教の生命というのはそういう静的な「永遠に眠る」とかいうようなことは違うんですよ。向こうに行っても生き生きと生きるというような、もの凄い活動的な

ものが「天国」だと思っている。だから、もの凄く行動的な、

「天国に行っても寝てる暇がないんですよ」

と、誰かが言いましたが、絶対寝てる暇なんかない。天国に行ったら行ったで、片付けないといけないことが山とある。だから、パウロが向こうへ行っても、パウロの言葉がかかってくるでしょ。イエスが死んで天国へ行かれましたよね。けれども、復活体として来られたでしょ。ああいうふうに、キリストの生命というのは、そんな「眠っている」というような存在ではないんです。

だから、ユダヤ人は実践的なことを考える。ギリシャ人は観念的なことを考える。そしたら、日本人の我々はやっぱりキリストのこの生命を本当にいただいて、もう死んでも死なない生命ですからね、あっちへ行ったら。それこそ今以上に働かないといけないのではないかなという行動的な実践的なことなんです。それをここで小池先生は、その次に

「身証（しんしょう）」

という言葉を使っていますけれども、本当に実践的なものをもらわないと、この地上でも実践的に――必ずしも誰かを捕まえて

「キリスト教、キリスト教」

なんか言う必要はないですよ――本当に喜んで生きているという、その姿そのものがやはり実践だと思う。だから、そういうふうな姿で毎日毎日を生きてほしいなというのが僕の思いなんです。

教会に行っても、自分にそういう意識がなくてもいいんですよ、何もなくてもいい。その信仰のある途上では分からないから、そういう時代もあるでしょう。だから、それはそれでいいけれども、最終的にはやはり実践的に、実際に喜んで生きていないと、これは損ですよ。損得でいったら、もう本当に、

「この人生はやはり喜んで喜んで生きる」

ということが非常に大切です。日々、そういう生き方をしたら、もうそれほど幸いなことはない。この「実践」ということは「何か人にしてあげる」とかいうことではないですよ。自ずとそれは成っていくものなんです。

「喜んで神さまのところで、自分の中に神さまが生きておったら、もうそういうことは自然に出て、やっていける」

という、そういう自然なものなんです。

子どもが自然に生きているように、我々も子どもにされて自然に生きていく。それが伝道だと思う。

「伝道、伝道」

というと、

「言葉で伝えないといけない」

とか、いろんなことを思ってしまうかもしれないけれども、喜んで生きていたら、このサマリヤ人のやったように、やっぱり人に何か親切にしてしまうということです。

こういう状態というのは滅多に僕らが遭遇することはないですよ、日常生活でこんな強盗に襲われたりとか、そういうことはまずないけれども。小さいことが毎日毎日積み重なっているということが大切なことで、

「それが喜んでいることによって、知らない間に実践している」

というようなことが一番大切なのではないかなということです。

最後の2行のところに、

「そして聖書の真理の性格は、神の認識の問題ではなく、神に対していかに行動すべきかの実存の問題である。啓示の神に対する関係と態度の問題である。」

と、ここで難しい言い方をしてますけれども、結局は、

「神に対していかに行動するか、いかに喜んで生きるかということが問題ですよ」

ということを言っている。ここで、小池辰雄が

「実存」

という言葉を使っている。小池が57歳のときこれを書いたと聞きましたけれども、あの当時は「実存主義」というのが流行ったので、こういう言葉を使っている。「実存」というのは御存知のように、

「自分の身を投げだして人のために尽くす」

というのが実存なんですね。神さまは「啓示の神」と書いてありますけれども、天界から人間の世界に躍り込んできて、そしてキリストを十字架にかけてしまったでしょ。それが、人のために生命を尽くしたという、本当に身を投げだして、自分の存在を投げ出して人のために尽くした。そういうのが実存の在り方です。だから、ここで

「実存の神」

というような表現を小池辰雄はしたわけです。何か難しい言い方をしてますけれども、結局はそういうことなんです。

●身証こそが問題

《身証こそが問題

イエスは、しかし律法学者の質問に対して直ちに答えない。イエスの問答を見ているとしばしばそうである。反問する。律法学者ともあろう者が、そんな根本問題がわからなくて、よくも人を教え得るものか、というわけで、イエスは逆に、

「律法には何と書いてあるのですか、どうあなたは読みなさるか」（10・26）

と専門家に答を要求した。専門家としてこれに答えられなくては恥辱である。律法学者の答そのものは幸にも正解であった。彼はすなわち、申命記6・5とレビ記19・18

後半をもって答えた。申命記6・5は

「聴けイスラエル！」（6・4）

に始まるところの有名な命題で、ユダヤ人が日夜誦（そらん）じているような文句である。丁度クリスチャンが「主の祈り」や「使徒信経」をそらんじていて、すらすらと答えるようなものである。レビ記には、

「あなた自身のようにあなたの隣人を愛さなければならない。私は主である」

と書いてある。この「私は主である」をおとしてしまったところに、律法学者の実は重大な欠陥がある。そのことをイエスは指摘しなかったが。しかしこれを今ここでは論じないが、律法学者の答はひとまず及第。倫理の答案としては満点で、イエスは

「よく答えなさった」

といった。しかしイエスにとっては、神学的、倫理的な言や、紙上の答案が問題なのではない。身を以って答える答案、身証（しんしょう）こそが問題である。だからイエスはつけ加えて、

「そのように実行しなさい。そしたらいのちが得られますぞ」（10・28）

とさとした。》

この「身証（しんしょう）」、身体（からだ）をもって証（あかし）をするということです。そういう言葉を小池辰雄は使っているけれども、これは前からの流れを考えると、「実行しなさい」ということです。

「身をもって実行しなさい」

ということが「身証」ということです。「証」というのは単に言葉で証をするのではなくて、からだ全体で、生涯そのものでもって証をするというのが身証という意味です。ここで申命記のことを引用してますけれども、その通りなんです。

「聴け、イスラエル！」

という言葉です。ここから始まるというわけでしょ。そしてそのあとで、

「私は主である」

で終わっている。「私は主である」ということを落としたのが欠点であると書いてありますけれども。「私は主である」ということは非常に重大なんです。人から手紙をもらっても、先ず差出人が誰かということを見ますよね。差出人が不明だったら、やはり全然意味がないわけですよ。「私が主である」というのはもの凄く重い言葉なんです。

「私が主である。私こそお前を永遠の生命に導く愛の権化なんです。お前を助けないではおられないものですよ」

という含みがここに入っている。

「私は主である。お前をどれだけ愛しているか。どれだけ愛し抜くか。愛しぬいたか。将来も愛しぬくんだよ」

という思いが、「私は主である」という一言の中に入っている。だから、この一言、「私は主である」という言葉の送り主の言葉をぬいたことが非常に欠点であるということを小池は言うわけです。

「私こそお前を愛しぬいて、生命に導くものなのだから、この言葉を本当に心して
聴けよ」

というのが、

「聴け、イスラエル！」

です。この「聴け、イスラエル」から今の時代でも、一人ひとりに言われているんです。

「聴け、弘野慶次郎よ！」

「聴け、小池牧子よ！」

とかいうことですよ。一人ひとりにこれを言われている。「聴け、イスラエルよ」と言ったら、焦点がボヤけてしまいます。けれども、「聴け、誰々よ！」ということを言われたら、これは本当に神さまから直々（じか）にその一人ひとりに語りかけられていることでしょ。旧約聖書はこの「聴け、イスラエル」でいいんです。けれども、新約になってキリストが来られた以上は、それを一人ひとりの名前をもって、

「聴け、誰々さんよ」

と言われている。

「私は主である。私はあなたの生命を救ったイエス・キリストである」

というふうに読み替えないといけない。だから、「聴け、イスラエルよ」は「聴け、誰それよ」と。そして、

「私はお前を救った、永遠の生命を与える、私はイエスである」

というふうに読まないと、これはダメなんです。旧約聖書はこういうふうに書いてますけれども、実際は我々一人ひとりにこう語りかけられているということで、これを落としたということは律法学者の欠陥であるというふうに書いている。けれども、

「答えはひとまず及第」

と書いてあるように、スラスラと使徒信条を諳（そらん）じると同じようにユダヤ人にとってはこれは当たり前のことだったから、スラスラと答えることができた。けれども、スラスラと答えられたということが及第ではない。その証拠に、

「隣人とは誰ですか」

とまた問うわけでしょ。それは分かってないからです。答えは及第でも、実際にはこの律法学者は分かってないから、そういうチンプンカンプンの問を発したというわけです。

だから、我々は「ひとまず及第」では困るんです。実際にからだでもってキリストの生命、キリストの愛、キリストの喜びを身をもって生きていかないと、これは意味がないということになります。イエスは、

「よく答えなさった」

と一応ほめてはいますけれども、これはキリストの中の皮肉みたいな感じもしますね。

《キリスト者が、いかに聖書を研究し、これに通じ、すらすらと答えられ、あるいは論文が書けようと、説教ができようと、それが満点であろうと、それで天国には入れない。天国の門は、神が生活を文字と判じて入れてくださる門である。万人共通の文字とは生活そのもののことである。その他の一切の資格はここでは通じない。「いかに生きたか」は、もはや単なる信仰でもない。人間は何びともこれを判定することをゆるされない。ただ神のみの判断による。それがイエスがここで「行え」の一語で要求した内容である。「全生涯そのもので行ぜよ」という意である。イエスはあるときは、ただ「信ぜよ」（ヨハネ6・29）と言う。それも「全生涯そのもので信ぜよ」なのである。この「全生涯」もある場合は一日であるかも知れない。否一瞬であるかも知れない。その一日、一瞬が全生涯をひっくりかえすような一日、一瞬であるならば。

「信ぜよ」も「行え」も同然なのである。それは信行不離、信行一如、信行一貫であるからなのである。いわゆる信仰と行為といって因果関係的に、二段がまえ的に考える消息ではない。》

ここは読んでいると、もの凄く分かります。その通りだと思うけれども、ただ言葉が難しい。

「信行不離、信行一如、信行一貫」

とか、こういう言葉は言っても通じないですよね。こういう言い方は絶対に通じない。そこが小池辰雄の時代背景もあるし、それから無教会に対する思いもあって、こういう難しい表現もするんでしょうね。明治の人ですから、こういう言葉もスラスラと出てくるんでしょうから、これは仕方がないんですけれども、これをそのまま僕らが言葉として、「信行不離、信行一如、信行一貫」とか言っても、それは実際にはダメなんですよ。だから、それを噛みくだいて、

「からだでもって表さないといけないんですよ」

ということを言っている。

「万人共通の文字とは生活そのもののことである。」

ここは大事ですよ。誰でもその共通の文字とは生活そのものことであると書いてあるでしょ。生活そのものですよと。一日一日の生活そのもの。汗をかいて、食べて、それからトイレに行って、生活をしているその一日一日がもの凄く大切で、それが文字ですよと言っている。生活というのは本当に毎日毎日の生活でしょ。しんどい時もあれば、喜んでいる時もあれば、食べてトイレに行くというのが我々の日常の生活ですよ。そういうふうな日常の生活そのものが、具体的な日常の生活が、

「万人共通の文字ですよ」

と小池は言っているわけです。小池はいろいろ欠点もありますけれども、やっぱり生活そ

のものはちゃんと分かっておられたのではないかなと思います。

「「いかに生きたか」は、もはや単なる信仰でもない。」

「信仰、信仰」と言っているのは、それはそうじゃないよと言う意味です。そしてもの凄く大切なことが書いてある。

「「全生涯そのもので行ぜよ」という意である。……それも「全生涯そのもので信ぜよ」なのである。この「全生涯」もある場合は一日であるかも知れない。否一瞬であるかも知れない。」

「全生涯」といったら、もの凄く幅が広くて、

「そんな、全生涯なんて、そんなものはできるか」

なんて、つい思ってしまいますけれども、この「全生涯」は一日でもいいんですよ、一瞬でもいいんですよと書いてくれている。ここは小池の凄いところですね。「全生涯」とか、「全身」とか言いながら、結局それは一瞬、

「神さまが私たちの中に入ってくださったら、一瞬でもそれは永遠なんです」

よということを言っている。

そういう言い方を小池辰雄はしているから、これはもの凄く大切なことなんです。「全生涯」といったら、

「明日も明後日もあるわ」

と思ったら、しんどくなりますよね。けれども、その時その時が神さまとの対話というか、神さまと一緒に生きるということですから、

「その一瞬がもの凄く大切ですよ、その一瞬が生涯であることもあるんですよ」

ということを言っている。そういうことを、小池はやっぱりさすがですよね、もう何か頭で考えてないところがあります。小池はその一瞬一瞬を大切に神さまと共に生きていたのだろうと思います。そうでないとこういう言葉は出てこないのではないかなと思います。

「いわゆる信仰と行為といって因果関係的に、二段がまえ的に考える消息ではない。」

「信仰を持ってから行為をしますという二段構えではないんですよ」

ということを言っている。

「信仰を持ったら直ちに信仰と行動とは一緒です。信仰そのものが行動ですよ」

という言い方もあります。だから、信と行とが別々にあるのではない。それが「信行一貫」ということ。もう切り離すことができない。二段構えではない。信と行との間に距離なんかはない。

「信をいただいたら、直ちにそれが喜びとなって、行為となって出てくる」

ということなんです。

「行為、行為」

になったら、また

「自分の力で行おう」

というようなことになってしまいそうですけれども、「自分の力で行おう」なんていうことはできない。神さまが下さった御霊によって私たちはもう直ちに、間髪を入れずに行動に移していける。その行動というのは、頭で考えた行動ではない。子どもが喜んで生きている時にお母ちゃんがとんでくる。ああいうのが行動ですよ。そういう行動を我々は神さまから要求される。それが

「信仰のみ」

ということですよ。決して「信仰のみ、信仰のみ」ということを自分が思わなくても、直ちに喜んで行動に走っていく、自ずから出ていくということです。だからパウロは、

「キリストの愛にかられて、やっている」

と言っているでしょ。

「決して自分の力でやっているのではない。神・キリストの愛に迫られて、駆り立てられてやっているんだ」

という言い方をしてます。それと同じようなことを小池はここで言っている。

●信即行

≪信即行

そのような信行一如は、どこにこれを体得する秘訣があるのか。それはレビ記19・18の

「私は主である」（原文「私はヤハウエー〔実存神〕である」）

の一言にかかっている。それは単なるつけ足しの言ではなく、土台石の言である。原動力の言である。

「かく命ずる私はおまえの主である。信頼せよ、私が力を与えてやるから。おまえはできるぞ、させてやるぞ！」

という上からの力、我らの中に入ってくる力の言なのである。とかくプロテスタント信者が「聖言（みことば）」ということをいうけれども、ルターも「神の言」を強調したけれども（しかしルターはルター派の人たちよりもずっと聖言と聖霊を結びつけていたのではあるが）、もし神言を、み霊と共に現に受けとるのでなかったら、信仰は結局律法主義たるをまぬがれない。勿論われらの現実は信行一如たることがむずかしいが、信行一如の呼吸を身に体することが重要である。みたまが内住していると、たとい信と行の関係が跛行（はこう）的であっても、信と行とが不可離の質をもってくることはたしかである。みたまにあって、根源的に信即行の受け方をしない限り、福音は生きたものとならない。神の言が力とならない。

キリストに「行え」と言われるとき、私たちはこれを律法の命令と解してはダメで

ある。ところが福音書にたくさんでてくる、そういう命令または禁止的なキリストの言を福音として受けず、律法的にとっている読者が何と多いことだろう。キリストの「行え！」はただちに

「私が行わしてやる、私が力だから、私そのものをまず受けよ！」

とひびいてくる。そこがすなわちみ霊のキリストをうちに迎える事態なのである。そこに「行」が「信」と渾然融合する境地が開かれる。「信」そのものが、烈しい内的「行」として全身の投入、突入であり、行が信か、信が行か。信行一如、無私無我。在るはただみ霊の主の御はたらき。これを無的実存とはいう。しかも、一人の僕（しもべ）、一人の婢（はしため）がいとも人間らしく、心砕け、微笑をもって行ずるところの天的自然である。》

これは繰り返し同じことを言っている。

「かく命ずる私はおまえの主である。信頼せよ、私が力を与えてやるから。おまえはできるぞ、させてやるぞ！」

ということです。自分の力でするのではない。だから、律法学者が「行え！」とか言われたでしょ。その時に、律法学者ですから、

「それなら、お前の力でやってみろ。やれるものならやってみろ」

というような感じです。繰り返しますけれども、そういうことでした。違うんですよ。

「かく命ずる私はおまえの主であるから、私が全部引き受けたよ。全部引き受けて、お前にさせてやるぞ」

ということなんです。だから、

「土台石の言である。原動力の言である。」

ということを言っている。

「私が主である」

という言葉がもの凄く大きな重みを持っているということなんです。これは御霊の力でなかったら、私たちの体の中に、存在の中にキリストが宿らなかったら、これは律法主義になる。律法主義というのは、「ただ自分の力でやる」ということですよ。何もかも自分の力でやる。それが律法主義ということ。

「信仰は結局、律法主義たるをまぬがれない。」

と書いてあるでしょ。とにかく御霊による信を受けとらなかったら、これは頭で考えた律法主義になってしまいます。

「何々しなければならない。何々してはいけない」

という律法主義になると、しんどいですよ。全部、自分の力でやらないといけなくなる。教会とか、そういう所の欠陥はやっぱりそういう律法主義に陥（おちい）っている所が多いからです。ここで指摘しているでしょ。

「そういう命令または禁止的なキリストの言を福音として受けず、

これは福音ですよ、福き音信なんです。福音として、ありがたい恵みのおとずれとして受けとらないで、

　律法的にとっている読者が何と多いことだろう。」

律法的に、要するに旧約聖書みたいに、旧約時代と同じです。クリスチャンというのは、「クリスチャン」という名前が付いているから、律法的に

「何か悪いことをしてはいけない」

とか、そういう思いにかられるわけです。これはある程度は仕方がない。僕は学生の時、始めは嬉しくて聖書の世界に、福音の世界に入った。ところが、それまで聖書なんて読んだことがないでしょ。聖書を読み始めたら、

「何々してはいけない。何々を行え」

とかいっぱい書いてある。それから苦しくなったんです、僕は。その話をしたら、他のクリスチャンも「私もそうだった」と言う。だから、信仰のある段階では、そういうところも経験することがある。奥田先生とか奥田先生の奥さんとかは本当に喜んでおられるから、そういう時代はなかったのかもしれませんが、僕にはあった。他の人に聞いても、始めは嬉しかったのに、聖書を読み出したら、苦しくなってしんどくなったとか言って、そういうことを言う人がよくいるんです。この律法主義というのがそういうことですよ。

「何々せよ、何々してはいけない」

ということを直に受けとってしまうと、自分は及第することがないわけです。もの凄く苦しくなるわけですよ、何もできないから。何もできないですよ、「何々せよ。何々してはいけない」とか言われても、それは人間には不可能なことなんです。だから、

「律法主義に陥ってしまってはいけませんよ」

と、ここで小池は釘をさしてくれている。そしてここで大切なのは、

「みたまにあって、根源的に信即行の受け方をしない限り、福音は生きたものとならない。」

と書いてあるでしょ。

「福音とは生きものである」

ということを言っている。福音は生きものなんですよと。「生きもの」ということは、

　「生めよ、繁殖よ、地に満てよ」（創世記１・38）

ということですよ。「生めよ、繁殖よ、地に満てよ」と、創世記に出てきます。生きるということは、生きものであるということは、「生み出す」ということ。拡がるということなんです。福音が地上に拡がってほしいという願いがあの創世記にはある。それがキリストのところまで来ている。そしてキリストによって初めて我々は、「生めよ、増えよ、地に満ちよ」とは、

「神の愛が、神の生命が地に満ちよ」

ということなんです。それが「生きもの」ということです。だから、

「福音というのは生きものである、存在が拡がっていって産みおとしていくものです」

ということが、「福音は生きものである」ということなんです。ここで読みおとしてしまいますが、

「みたまにあって、根源的に信即行の受け方をしない限り、福音は生きたものとならない。」

本当の生きものにはならないですよと。だから、我々はキリストの愛をもらったら、生命をもらったら、生きものとして働かないといけないということなんです。

「福音そのものは生きもの、よき音信は生きものそのものです」

ということをここで言っている。

「神の言が力とならない。」

生きものというのは力です。子ども見たら、生き生きしているでしょ。幼児を見たら、生き生きしてます。あれは本当に力なんですよ。子どもらしい力です。ああいう状態が福音であって、あれが本当に「生きている」ということです。「天国」といっているのは、さっきみたいに

「行動的で、生きていく、積極的である」

というようなことです。天国へ行くのもそういうことです。「永遠の生命」というのはそういうこと。本当に生きて人を変えていかないと、これは生きたものにはならない。

子どもの生きざまを見ていたら、僕らは嬉(うれ)しくなりますよね。子どもが嬉々(き)としてやってるところを見たら嬉しくなるでしょ。

「そういう生き方を我々もしてくださいよ」

ということなんです。ここに、

「私が行わしてやる、私が力だから、私そのものをまず受けよ！」

と書いてくれている。

「お前も同じようにして行えよ」

と言われても、これは無理なんです。僕が最初の頃にしんどかったと同じように、これは無理です。

「私が行わせてやる、私が力だから、私が愛だから、私が生命だから、行わせてやるよ」

ということですね。

「私そのものをまず受けよ！」

ということをここで小池辰雄は言っている。

「「信」そのものが、烈しい内的「行」として全身の投入、突入であり、行が信か、信

が行か。」

と言っているでしょ。これはさっきから小池が繰り返しているように、これは離すことができないんだということです。

「行が信か、信が行か。」

これはもう離すことができない。そして、

「信行一如、無私無我。

信行一如になって、無私無我が我々に来る、私が無くなるんです。我が無くなるんですよというのが、「無私無我」です。

在るはただみ霊の主の御はたらき。

それだけということ。自分が無くなって、

「在るはただみ霊の主の御はたらきだけ、キリストだけなんです、もう自分は無くなってしまっているんですよ」

というのが「無私無我」ですよ。

「自分が無くなってしまっている。在るはただ御霊の主の御はたらきだけ、主キリストだけなんですよ」

ということ。それが「無私無我」です。

これを無的実存とはいう。

また「実存」という言葉を使っていますけれども。

しかも、一人の僕、一人の婢がいとも人間らしく、心砕け、微笑をもって行ずるところの天的自然である。」

「天的な自然」と書いてますでしょ。人間的な思いの行為ではない。

「天的な、神からくる、イエス・キリストからくる、天的な自然現象なんですよ」

という。最後の言葉はそうですよ。これは自ずからやっていけるんですよということを言っている。

「一人の僕、一人の婢がいとも人間らしく、心砕け、微笑をもって行ずるところの天的自然である。」

と書いてある。我々はやっぱり一人ひとりが微笑んでないとダメですよね。

「微笑んでいる所にごく自然な、天的な自然な働きが一人ひとりに生じていく」

ということを小池は言っているわけです。だから、小池の言葉を一人ひとりが噛みくだいて考えていかないと、ちょっと難しくなりますよね。

小池先生の本を読んでから余計に難しくなったらダメです。やっぱり福音というのは本当に子どもが分かる世界なんです。

「子どもが分かる世界でないと、真理とは言えない」

と、僕は毎回言いますけれども、そうなんです。教養も何もない人が分かる世界でないと、

これは福音とは言えない。

勉強した人だけが福音の中に入るのだったら、これは入学試験と一緒ですよ。一生懸命で勉強しないと入れないということとは違う。何も知らなくても入れる世界が本当の世界です。だから、子どもの世界なんですね。それを難しく難しくしたらダメなんです。それを小池は難しい表現をしている。小池はこんな難しい表現を本当はしたくはなかったかもしれない。けれども、本当の砕けた魂に小池はなっていたんですよ。だから、

「一人の僕（しもべ）、一人の婢（はしため）がいとも人間らしく

本当の人間らしく、本当の人間ですよ。「神の子、光の子」という意味です、「人間らしく」とは。子どものような姿が「人間らしく」ということです。

心砕け、微笑（ほほえみ）をもって行ずるところの天的自然である。」

天的自然の世界ですよとここで言っている。これは小池辰雄が自分で体験しているからこれを書いている。ただ表現が難しいだけの話で、噛みくだいていえば、

「子どものように生きているあの姿が神々しいんですよ」

ということを、小池は言っている。だから、小池の本を読むには――そういう小池が体験した本当に子どもらしい、子どものような魂に対して小池が書いている――あれはもっともっと易しく解説しないと、これは人には伝わっていかない。子どもには伝わっていかない。そういう生き方を我々一人ひとりがやはりしていかないといけないというように僕は思っている。

●愛の生命、無的実存

《愛の生命、無的実存

そしてこの「行」の内実は何であったか。ただひたすらの「愛」であった。全心、全霊、全力、全思の愛であった。全存在の愛である。縦は神に対し、横は人に対しての愛。縦横一貫の愛！　永遠の生命は、単に山にこもって瞑想祈祷して得られるものでなく、不老不死の妙薬を飲み、健康法を案ずることによって得られるのでもない。ただ神と人とを愛することによって得られるものである。ここにキリストの福音の真価がある。

さてこの律法学者は、「行え」と言われて実は最も痛いところをつかれたにも拘らず或はつかれたがゆえに、自己義認、自己弁護の角度から

「ところで私の隣人というのは誰のことですか」（10・29）

と、イエスに逆襲した。しかしこの逆襲自身が、気の毒なことに、いかに現実に人を愛していないかを自己曝露しているわけである。まことに人を愛しているなら、彼は隣人が何であるかを知っているはずであるからである。問題はどこまでもあたまの問題や机上の問題ではないのである。律法学者が自らの律法知識を誇り、パリサイ人が

自らの実践を誇り、キリスト者が自分の信仰、自分の宗派、自分のグループなどを誇り、聖書学者が自説を固守したり、すべてそのような自己義認の心根を、キリストは、偽善と称し、パリサイ根性として斥（しりぞ）けた。》

これを読んだら分かりますよね、今まで言ってきたことが。最後に書いてあるでしょ。

「律法学者が自らの律法知識を誇り、パリサイ人が自らの実践を誇り、キリスト者が自分の信仰、自分の宗派、自分のグループなどを誇り、聖書学者が自説を固守したり、すべてそのような自己義認の心根を、キリストは、偽善と称し、パリサイ根性として斥（しりぞ）けた。」

これは紙一重なんですよ、本当に。自分が出たら、これは律法主義になって、自分を誇ってしまう。僕はこの歳になってキリストの愛を分からせてもらったでしょ。これは僕は良かったなと思う。若い時にこういうことをキリストからもらっていたら、もう本当に天狗になってどうしようもなかったと思うんですよ、僕は若い時だったら。ある程度歳をとって経験をつんだから、天狗にならないで済んだなと思っている。僕はそんなふうに神がその時を与えてくださったと思う。本当にこれは自分の力でやったら、自分を全部誇ってしまう。それを最後に書いてくれている。パリサイ根性というのは自分を全部誇るわけです。そういうことではないんですよということを言ってくれている。そしてやっぱり、

「神と人とを愛することが重要ですよ」

ということなんです。

「神を愛せよ。人を愛せよ」

とかいうのは、繰り返し始めから学んできたように、己の力でできるわけがない。けれども、神の要求は、

「神さまを本当に全身全霊で愛せよ。人を自分のように愛せよ」

というのが神さまの命令なんです。でも、それはできないけれども、

「私がさせてやるよ」

というのが福音の世界なんです。だから、

「喜びの世界です。自分で何もしなくていいんですよ」

という意味です。

「自分の力でする必要はない。私が全部引け受けた」

ということです。それが

「愛の生命、無的実存」

ということの意味なんです。

「この「行」の内実は何であったか。ただひたすらの「愛」であった。」

と。ただひたすらの愛。もう愛以外には何もないんですよと。生命以外は何もないんです、ただひたすらの愛。愛というのは生命ですから、愛なんです。だから、

「全心、全霊、全力、全思の愛であった。全存在の愛である。」

と書いてある。これは神さまの「全存在の愛」なんです。神さまの全存在の愛を受けとる。自分の全存在の愛ではない。神さまの、キリストの全存在の愛を我々が受けとって、という意味です。だから、

「縦は神に対し、横は人に対しての愛。」

と書いてます。

「十字架は、縦の棒は神さまとの関係で、横の棒は人間同志の愛の姿です。それが十字架です」

ということを小池辰雄は言いました。

「縦横一貫の愛！　永遠の生命は単に山にこもって瞑想祈祷して得られるものでなく、不老不死の妙薬を飲み、健康法を案ずることによって得られるのでもない。」

これも地上のことですよね、こういうことは。

「ただ神と人とを愛することによって得られるものである。ここにキリストの福音の真価がある。」

と書いてます。「ただ神と人を愛する」と、こういう言葉があると、

「自分で愛さないといけない」

とかまた思ってしまう。

「そうではないよ、私が全部引き受けて、お前を神の子、光の子としてやったんだから」

ということですね。

「ここにキリストの福音の真価がある。」

と。よい音信（おとずれ）の本当の価値があるんですよということをここで言っている。本当に人間回復です。

「キリストが来られて――我々は影にすぎない人間だったけれども――キリストによって神の子、光の子とされて、本当の人間にされた、本当の幼児（おさなご）にされた」

というようなことがここの意味です。

●サマリヤ人の譬話の構造

繰り返し小池辰雄は言ってますけれども、「サマリヤ人（びと）の譬話の構造」も読んでみましょう。

《サマリヤ人の譬話の構造

そこでイエスは誰にでもわかる譬（たとえ）話のかたちでこの学者に答えた。サマリヤ人の譬話は、第一場が、旅人と強盗の場。第二場が、半死半生状態の旅人のわきに来ては過ぎ去る祭司とレビ人。それからねんごろに介抱し、家畜に旅人を乗せ、宿屋をさしてゆくサマリヤ人の場。第三場は、サマリヤ人と宿屋の主人との場。イエスはおそらく

即興的にこのような譬話を創作する。真理は彼にとって具象的である。

「われは真理（まこと）なり」

といったのも、このように、イエス自身が真理の具象であるからである。

祭司やレビ人は宗教、祭儀のことにかけては専門で、宗教生活の師表たるべき人々である。それが現実に、あわれむべき人を道ばたに見て、見ぬふりをして、道を「あちら側によけて過ぎ去って」しまった。（アンティパレールテンというギリシア語はそういう意味あいをもっている。）イエスのこの表現の奥には、時の祭司、レビ人、及び律法学者などへのするどい批判がこもっている。

ところが第三番目にさしかかったのは元来ユダヤ人の仇敵であるサマリヤ人である。ヨハネ福音書第４章でサマリヤの女が井戸端にやって来たイエスに向って、

「あんたはユダヤ人でありながら、どうしてサマリヤの女の私に、飲ませてくれとおっしゃるんですか」（ヨハネ４・９）

と言ったように、ユダヤ人とサマリヤ人は犬猿の間柄であった。このサマリヤ人にとっては、そこに横たわっている旅人は、仇敵のユダヤ人だろうから、「ざま見ろ！」くらいの棄台詞で冷笑して立ち去っても不思議はないところである。ところが彼は、あわれみに堪（た）えず、近よって、まずねんごろに言をかけ、同時にオリーブ油と葡萄酒で外科的治療を施し、多分驢馬（ろば）に乗せて、旅籠屋（はたごや）にかつぎこみ、更に介抱し、多分旅人の横にねていたわり、翌朝出かけるときは、宿屋の主人にデナリニ枚をあたえて、二日間の労銀とし、看護をたのみ、

「不足だったら、帰る時に立ち寄って支払いますから、よろしくたのみます」

という肉親も及ばぬばかりの心づかいである。仇敵に対して、これは現実にはちょっと考えられないほどの思いやりである。

「敵を愛せよ」

とは、まことにこのように敵を荷い救いあげることである。》

これを読んでいると、よく分かりますよね。ここはあまり難しい表現はしていない。

「真理は彼にとって具象的である。」

と。真理はやっぱりどこまでも具体的なんです。旧約時代はいろいろと神さまからの現象が出てきました。旧約時代には、あの「雲の柱」で導かれて行ったでしょ、出エジプトするときやなんかに。そやけど、それは具体的であるけれども、まだ本体は分からなかった時代です。ところが、キリストという具体的――神さまが具体的な人となって来たということが――もの凄い具象的、具体的なんです。そのことが背景にあって、

「真理は彼にとってはいつも具体的である、具象的である」

ということを言っている。本当に生きているということは、本当に毎日毎日が具体的なことでしょ。我々が生きているということはもの凄く具体的なことですよ。

「その具体的なことが真理なんです」
ということをここで言ってくれている。

「われは真理（まこと）なり」

と。「真理なり」ということは本当に具体的でなかったら、「観念的に真理である」とかいうようなことは意味がない。死刑を宣告される時に、キリストは

「私は真理である」

と言ったら、

「真理とは何か？」

と問われるでしょ。あれは頭の中で真理を思っているから、そういう問が出てくる。ここで小池辰雄は、真理というのは本当に具体的ですよと言う。

「真理は彼にとっては具象的である」

と。真理そのものは具体的でなかったら、意味がないんですよということを言っている。

「イエス自身が真理の具象であるからである。」

と言っているのは、神さまが具体的な人をとって、この世に救い主を与えてくださった、遣わしてくださったということが、

「イエス自身が真理の具象である」

という意味です。神さまはただ言葉だけで、「聴け、イスラエルよ！」と言っているのではない。この終わりの時代に具体的にキリストという救い主をこの地上に遣わしてくださった。それが「イエス自身が真理の具象である」という意味です。旧約時代はこんなのは分からない。新約でキリストが来られて初めて、神さまが具体的なものとして我々に迫ってきたということですから、

「イエス自身が真理の具象であるからである」

という。だから、

「真理というのはいつも具体的、具象的でないといけない」

ということを言っている。ここでも、

「時の祭司、レビ人、及び律法学者などへのするどい批判がこもっている。」

と。僕はさっき、「これは皮肉ではないか」と言ったけれども、律法学者たちや当時のユダヤ教の指導者たちに対する鋭い批判がここにこもっているんだということを、小池辰雄はここで述べてくれているわけです。

●隣人愛

《隣人愛

イエスは語り終えて、律法学者に、

「これらの三人のうちで一体誰が強盗どもに襲われた旅人の隣人となったとあなた

は思うのですか」

と問うた。この場合イエスは、「誰が隣人を見いだしたか」とは言わなかった。主客の転倒である。「誰が隣人となったか」である。これでは律法学者の高慢な鼻のもってゆきどころがない。彼は

「その人にあわれみ深い行いをした人です」

と自明の答をした。そのとき、彼が正直な魂なら、絶言。イエスの前にただ「まいりました。わるうございました」と平伏したろう。ところが律法学者は、イエスに

「さあ行って、あなたも同じように実行しなさい！」

と言われて、すごすごと退陣した。》

ここも分かりやすい言葉で書いてくれています。

「誰が隣人となったか」

ということですね。隣人というのは、家族とか、会社で働いている仲間とか、近所の人たちとか、全部、隣人がおりますけれども、必ずしもいつも心が通っているとは言えないですよね。

「一番近い隣人は家族や」

とか言いますけれども、家族との軋轢（あつれき）とかそういうのもあります。それは人間だから仕方がないけれども。赤の他人にも隣人になるということです。家族が一番近い隣人なので、一緒に生活していても隣人にはなっていないという場面も往々にしてありますよね。

「誰が隣人となったか?」

というこの問です。それも重いですよね。一緒に生活していても、隣人になっていないということもここに背景としては、それがあるんじゃないでしょうか。

●人間愛の回復

《人間愛の回復

さて我らは更にこの話の中心に入ってゆこう。このはなしの中心人物たるサマリヤ人の愛は何であろう。彼は半死半生の旅人においてユダヤ人を見ず、おのれにおいて、ユダヤ人と仇敵関係にあるサマリヤ人を見ていない。彼は旅人において、一人の人間を見、おのれにおいて一人の人間を感じている。敵も味方もない。イデオロギー的対立をも超えている。ソ連人もドイツ人も同じ人間である。東独も西独も同じく人間である。北鮮も南鮮も同じく人間である。中華民国人も中国人も同じ人間である。種族、民族、国民の奥に人間を見る。今や世界の人間が、人間自身を人間として自覚することを忘れたかの如くである。一人の人間の痛苦を痛苦としてなさけ深くおもいやり、これを癒さんとするところに、本当の人間性、人間味、人間らしさ、人間愛の発露がある。

二十世紀後半は、イデオロギーの深刻な対立下に、民族や国家のブロックの対立が生じている。政治的解決には限界がある。そのさきはどうにもならない。イデオロギーは自己主張とからみあって、にくしみとなる。イデオロギーは武力の裏づけをもって戦争への危険性を孕む。そのような対立が、ある一つの問題を発火点として、大爆発をしないとはいえない。世界歴史が幾たびとなく実例をもって証している。何ぴとも第三次大戦を心からおそれている。それなのに、何故真の解決へと、平和へと展開しないのであるか。それは単に政治とか軍備とか経済とかの問題ではなく、今や人間そのものの問題が大暗礁になって来ているからである。真の人間性の回復、人間愛の回復、これが焦眉の問題なのである。》

ここを今、読むと、本当にイスラエルの問題とか、ロシアの問題とか、もうこの通りですよ。けれども、僕らはどうしようもないですよ。何もできないでしょ、僕らは。本当に何もできない。僕らが一生懸命で神さまと一緒に喜んで生きていても、もう何もできないですよね。本当に何もできない。これは本当に絶望的な感じがします。けれども、どんな状態でも我々はやっぱりキリストと共にキリストを喜んで生きるということをしない限り、これはどうにもならないんです。イデオロギーとか、世界の問題は、僕らはどうしよもないわけです。世界第三次戦争がまた起こるかもしれません。今は局地的な問題になっていますけれども、我々は何ともいかんともしようがない。ただこの日本の片隅でキリストを喜んで生きるということしか、我々にはできない。我々が本当にキリストを喜んで生きるということがもの凄く重要なことです。何もできなくても、それがもの凄く重要なことです。この20世紀に、ソ連とアメリカが対立していた東西の関係だけではないですよね、今では。

「何故真の解決へと、平和へと展開しないのであるか。それは単に政治とか軍備とか経済とかの問題ではなく、今や人間そのものの問題が大暗礁になって来ているからである。」

人間そのものが、もう本当にどうしようもないですね。ほんまに人間はどうしようもない。キリストのこの贖いなしには本当にどうしようもないということですよ。

「真の人間性の回復、人間愛の回復、これが焦眉の問題なのである。」

こういうふうに書いてくれていますけれども、もう我々はどうしようもない。ほんまに日本のこの片隅で主を本当に喜んで生きることが、ほんまに求められているんです。ここに本当に喜んで生きていることによって、誰かが気付いてくれたらいい。そやけど、全クリスチャンというのは、１％とか、日本ではほとんどいないということですけれども、それだけ貴重なんですね。本当にここのところは、日本の現在と少しも変わらない。ここの小池辰雄が書いてくれた時代とひとつも変わっていない。

●サマリヤ人の心

《サマリヤ人の心

大自然を見よ、そこには限界がない。大地にも、大海にも、大空にも限界はない。ところが人間界には何と多くの境界線がほどこされてあるではないか。ヨーロッパには沢山の国境がある。わけても東西ドイツの境界線は「鉄のカーテン」といわれる物々しいものである。力ではとりのぞき得ない。イデオロギーを乗り超える人間のハートはどうしたのか。ユダヤ人たる敵の倒れているのを見て、ねんごろに抱きおこしたサマリヤ人（びと）の心はもうないのか。このような人間愛が回復されない限り、平和は来ない。このイエスの譬話は、実に二十世紀の人類の寒心すべき、実に情けない現実への深い警告ではないか。》

小池辰雄の時は、東西のソ連とアメリカとの対立の、そういう時代でしたからね。それがここに、

「人間界には何と多くの境界線がほどこされてあるではないか。」

とある。人間はほんまに境界線を作って、戦いに明け暮れています。20世紀だけではない。また21世紀、また僕らが死んだあとの22世紀はどうなっているか、本当に分からない。だから、今は、黙示録みたいな世界が、来たくはないけれども、もう来ざるを得ないんです、人間というのは神さまから離れているから。本当に神さまから離れているから、たとえ誰がいなくとも、我々はやはりキリストと共に生きる、それしかないんです。

●わがサマリヤ人、イエスよ

ここは小池辰雄の真情が書かれています。

《わがサマリヤ人、イエスよ

私自身、胸に手をあてて想う。私は何か。半死半生の旅人ではないか。あの旅人は私のすがたではないか。この惨憺（さんたん）たる私。パウロと共に、

「私は、何というみじめな人間なのだろう。だれが、この死のからだから、私を救ってくれるだろうか」（ロマ７・24）

という人間である。私はモーセの十戒のどれを全く信仰的に実行できただろうか。山上の垂訓に至ってはなおさらのことである。勿論私は法律上の犯罪をしたことはない。しかし神の眼には完膚（かんぷ）なき者である。「みじめ」という通りである。しかしまた主は知りたもう、私が過去幾星霜真心をこめ、無的実存を悲願とし、キリストの福音に迫られ、使徒的信仰の正道を目指して前進して来たことを。今ひとりドイツにあって〔この稿は一九六一年九月に書いた〕アルスター湖畔に出（い）で、夕暮に瞑想、夕陽だけを相手に、

「汝、太陽よ、汝は私の心を知る。今汝は湖面に光をおとしている。汝のその紅波、金波は私の心に通う。汝は万象を照し、生きとし生けるものを生かし、一視同仁

である、キリストが言ったように。偉大なるハートよ！　諸々の遊星をひき廻す汝の力よ。自然の愛の力よ！　汝は私を知る」

と声なき声で呼びかけた。

「鳥と虫とは鳴けども涙落ちず、
　日蓮は泣かねども涙ひまなし」

無者を悲願とし、福音的恩寵、無的実存を主より賜り、一切の運命、環境、失敗、磋跌、紆余曲折、誤解、中傷にも拘わらず、平伏すところ豁然として天路開かれ、一歩また一歩前進し得る恩寵の力、何ものにか替えん。偉大なる福音よ！　一切を歓喜にまで救いあげる力よ！　愛よ！

ただおのれを見れば、涙。完膚なき傷だらけの弱体、半死半生。ただひとり、ある旅人がこれを知って、ねんごろに介抱し、いやしてくださる。真のサマリヤ人、イエスであった！　み霊のキリストがわが胸三寸に来たり給う。私の心臓の破れを包み、深い傷をいやし、涙を拭ってくださる。

もう私はどうなってもいいのだ。私の存在はキリストに捧げられたものだ。私はこの福音のためには、一歩も退くことができない。蹲いても、滑っても、転んでも、起きあがる、前進する。退くは滅びである。傷だらけでも、こんどは私がサマリヤ人ではないか。なぜだ。キリストはこの半死半生の人間に葡萄酒、自分の霊血、十字架の血を以て贖罪し、オリーブの油、霊油なる聖霊をそそいで、私を不滅の愛で聖霊の人にしてくださったからである。キリストは私にとって、こんな最も身近な、否、身内のサマリヤ人である。

サマリヤ人！　何と親しみ深い言か。この一言にキリストの本願がこもる。

「汝、サマリヤ人であれよ！」

と肩をたたいてくださる。み霊のキリストがわが内から、

「地の極までもサマリヤ人として歩けよ！」

と言われたら、力は限りなくやってくる。歩きに歩いてどこまでも。

托鉢僧フランチェスコは正にその典型的な人物であった。≫

小池辰雄の思いがここに記されていますよね。

「私は何か。半死半生の旅人ではないか。」

自分は半死半生の旅人であるということを言っている。サマリヤ人がもう本当にイエスであって、自分を介抱してくださったというこの真情が、このサマリヤ人の譬えを自分と重ね合わせて、小池辰雄は語ってくれている。小池57歳のときの文章ですけれども。

「キリストの福音に迫られて」

こういうことを書いているんだということですね。

「無者を悲願とし、福音的恩寵、無的実存を主より賜り、

よきおとずれの恵み、キリストの実存を、神さまの実存を自分が賜ったということです。それをもらって、

一切の運命、環境、失敗、磋跌（さてつ）、紆余曲折（うよ）、誤解、中傷にも拘わらず、

我々は生きていたら、こういうことがありますよね、絶対あるんですよ。いろんなことがありますから、生きていると。

平伏すところ豁然（かつぜん）として天路開かれ、

神さまの方から天の道を開いてくださったということです。「我は道なり生命なり」という。天の道を開いてくださった。

一歩また一歩前進し得る恩寵の力、何ものにか替えん。偉大なる福音よ！

と書いてある。福音というものは本当に偉大なる喜びの音信（おとずれ）ですよということ。

一切を歓喜にまで救いあげる力よ！　愛よ！」

自分の存在すべてを、神さまの喜びにまで救いあげる力よ、愛よ、生命よ、ということです。これは小池辰雄が思いのままこう書いた。難しい言葉で書いてますけれども、砕いていえば、神さまの恩寵の力でもうこれは代えられない、

「キリストには代えられません」

という意味です。だから、

「偉大なる福音よ！　一切を歓喜にまで救いあげる力よ！」

尊い尊い福音よと。本当に喜びの力です、喜びの世界に救い上げてくださる力です、福音というのはそういう大きな力ですよということを言っている。

「ただおのれを見れば、涙。

と書いてますから、小池辰雄も本当にみじめな思いをしたんでしょうね。だから、自分はもう涙するしかないんだという。

完膚なき傷だらけの弱体、半死半生。

本当に傷だらけの弱体であって、死んでいるか生きているかという半死半生の、もう死にかけた人間ですということを言っている。

ただひとり、ある旅人がこれを知って、ねんごろに介抱し、いやしてくださる。

キリストがねんごろに介抱し、いやしてくださったから、私の今はあるんだよと。

真のサマリヤ人、イエスであった！　み霊のキリストがわが胸三寸に来たり給う。

真のサマリヤ人はイエスそのものですよと。み霊のキリストが本当に自分の胸の中に、存在そのものの中に来たりたもうた。そして、

私の心臓の破れを包み、深い傷をいやし、涙を拭ってくださる。

涙を拭ってくださったキリストよと、もの凄く感動して、小池は書いている。十字架を受けとったときの思いがこれですよ。だから、

もう私はどうなってもいいのだ。私の存在はキリストに捧げられたものだ。

小池が十字架を受けとってから、「私はもうどうでもいいんだ、そんな私なんかどうでもいい。私の存在はキリストに捧げられたものだ」と、こういう思いを小池は持った。これは小池のほんまの真情の吐露です。

私はこの福音のためには、一歩も退くことができない。

誰が何と言っても、もうこれに代わるものはないんだ。キリストにあっては、私は何を言われても一歩も退かないと。

「私はもうどうなってもいい。私の存在はキリストに捧げられたものだ」

というのが、小池辰雄の本当に真情ですよね。

躓いても、滑っても、転んでも、起きあがる、前進する。退くは滅びである。

生きているかぎり、これらはありますよ。躓く、転ぶ、滑る。だけれども起きあがる。それはキリストの愛の中におりますから、もう退くことは絶対にありえない。私の存在はキリストに捧げられたということです。

傷だらけでも、こんどは私がサマリヤ人ではないか。なぜだ。キリストはこの半死半生の人間に葡萄酒、自分の霊血、十字架の血を以て贖罪し、オリーブの油、霊油なる聖霊をそそいで、私を不滅の愛で聖霊の人にしてくださったからである。

本当にその通りです、これは易しい表現で言ってます。

「十字架の血によって贖罪されて、聖霊をもらったから、私は不滅の愛の中に生きているんですよ」

ということを言っている。

キリストは私にとって、こんな最も身近な、否、身内のサマリヤ人である。

ということを言う。

サマリヤ人（びと）！　何と親しみ深い言か。この一言にキリストの本願がこもる。」

キリストの本願が小池辰雄に襲いかかった、入り込んだということです。

「本願」

という言葉を小池は使いますけれども、神さまの本当の願いです。愛と生命を与えましたという本願です。与えたいというのが本願ですから。そういう

「この一言にキリストの本願がこもる。」

「私にその本願が来たから、この喜びに何も代えられない。キリストに私の存在を捧げる」

という小池の思いがここに凝縮されています。

『無者キリスト』にいろんなことが書いてありますけれども、時々、小池辰雄の真情が吐露されているところがある。ここも小池の真情の吐露ですよ。これを書いた時は、偽りなくこういう思いを持っていたんですね。もうキリストには代えられませんということです。

●隣人のなかにキリストが

《隣人のなかにキリストが》

今やキリスト教界は、あの使徒的な聖霊内住の信即現の現実に突入すべき転機にあると申したい。荷いの愛が天的本能となって来るであろう。人間性を豊かに備えつつ、それが天的本能に変質されてゆく。

霊火がともり、霊泉が湧いたら、信愛一如、信行一貫という質の根源現実が次第に身について来る、どんなに相対的現実はみじめでも、心配は要らない。

キリストはいろんな姿であらわれる。否、かくれて在（い）ます。あるときは子供となって、あるときは老人となって、また空腹者となってやって来たり、一杯の水をくれといってあらわれたり、旅人のすがたで来たり、裸身で衣をくれといったり、病人のすがたで横たわっていたり、牢獄につながれていたりする。そういうさまざまな隣人を助けたと思ったら、実はそれはキリストを愛していることであった、というわけである。マタイ福音書第25章31～46節のイエスの言がそのことを語っている。

私たち自身がサマリヤ人なる隣人となって生きるならば、いたるところに隣人を見いだすのである。そしてキリストは私たちをサマリヤ人にしつつ、私たちを通してサマリヤ人をつくり白眼を消して慈眼にかがやかしめる。にくしみの心を解いて、いつくしみの心に変質させる。愛の力は最も強い！　愛のみが生命を与える。愛のないところに生命はない。だからキリストは、愛するならば永遠の生命を嗣（つ）ぐといった。何たる真理か。》

●愛のない人は人間でない

《愛のない人は人間でない》

人間である限り、愛はある。愛のない人は人間でない。そして人間が最も飢え渇くものは愛である。しかしこの愛が今の世界に失われてきた。愛の喪失！　自我愛の渦巻いている巷（ちまた）にこそ愛が喪失しているのである。電車の中を見よ、人の波、人の渦の都会に愛が稀薄になっている。何たる妙な現象か。一触即発の呟き、不平、非難、怒鳴り、喧嘩といった冷たい感情が漂っている。しかし愛の言、愛の行為がそこに現われると、ハッといかに愛が喪失している世の中であるかにひとは気がつく。しかし次の瞬間にそれとなく消えてしまう。何となさけない、情（つれ）ない都会の風潮か。

しかし人間は本来神性、仏性が宿っているはずである。神の似すがたの影があるから、その本体を、根源を深層意識は慕っているのである。それを意識的に、無意識的に拒んでいるのが現代人の現実ではないか。快かるべき人間相互の人間愛の真の回復は根源的な愛の体現者キリストにぶつかるより他に道がない。十字架のキリスト、棄身の愛のすがた！　復活の主、永遠の生命の体現者！　聖霊の主、我らの中に宿って無量

者の質を賜るキリスト。大愛の霊なるキリスト（ヨハネ15・3、ロマ5・5）。人類は今、この霊を要する。この霊のみが力ある愛を与え、平安を与え、平和を展開する。≫

これは小池辰雄の真情の吐露から、最後のこの

「愛のない人間は人間ではない」

という、愛がもう消失しているという嘆きもここに出てきている。

「しかし人間は本来神性、仏性が宿っているはずである。」

我々は子どもを愛したりするでしょ。そういう慈悲の心は宿っているんです。だけど、それは完全ではない。人間の力ではどうしてもできない。だけど、それは知っているんですよ。愛することが重要であるということは、もう重々知っている。パウロも言っている、

「自分は本当に人を愛したいけれども、やりたいことをしないで、やりたくないことを勝手に自分はしてしまう」

というようなことを嘆いています。それですよ。もう自分は、人間というのは愛も知っている。そういう影が宿っているんです。だけど、それが完全でないから、どうしてもキリストの愛が必要だったんです。キリストの力が必要だった。

「神の似すがたの影があるから、

神の似姿の影はいつも僕らでも在るんです。だけど、在るけれども不完全で、人間はすることができないのが現実です。思っていても、愛することができない。それが人間です。それが十字架によって我々を人間回復してくださったんですよ。

その本体を、根源を深層意識は慕っているのである。

本当に慕っている。愛というものを我々は影として慕っている。だけど、完全な愛というのがないものだから――本当にこれは悲願ですよ――根源を深層意識は慕っている。我々は本当の愛を慕っているんです。

子どもなんかでも、動物でさえそうです。愛してくれる人のところへ行くでしょ。あれは愛を慕っているんです、みんな。我々も本当に愛を慕っているけれども、いかんせん我々は不完全なものだから、本当の愛を生きることができない。だから、

根源を深層意識は慕っているのである。それを意識的に、無意識的に拒んでいるのが現代人の現実ではないか。

多くの人は本当に「キリストなんか」と思ってますよ、みんな。キリスト教というのは、やっぱり「キリスト教」といったら、ちょっと敷居が高いんですよね、一般の人にとっては。だから、これは本当に我々は

「そういうキリスト教ではないんだ」

ということをからだで実践していかないといかん。神さまの方の本願がすごいから、その本願に任せてゆくということですね。

最後にここをもう一回読んでみましょう。

「しかし人間は本来神性、仏性が宿っているはずである。神の似すがたの影があるから、その本体を、根源を深層意識は慕っているのである。

本当に慕っているんですよ。

それを意識的に、無意識的に拒んでいるのが現代人の現実ではないか。

知っているんですよ、知っているけれども、キリストの方へ来ない。有名人はたくさんいますけれども、いっぱい人間的ないいことは言うけれども、その人が神さまのところへ来るかといったら、行かないんですね、そういう人も。

快かるべき人間相互の人間愛の真の回復は根源的な愛の体現者キリストにぶつかるより他に道がない。

キリストを受けるより他に道はないんだけれども、

「それを意識的、無意識的にみんな避けているんですよ」

ということなんです。残念ですね。

十字架のキリスト、棄身の愛のすがた！　復活の主、永遠の生命の体現者！

これはキリストですね。

聖霊の主、我らの中に宿って無量者の質を賜るキリスト。大愛の霊なるキリスト（ヨハネ15・3、ロマ5・5）。人類は今、この霊を要する。

キリストの本当の生命の愛の霊を要すると。

この霊のみが力ある愛を与え、平安を与え、平和を展開する。」

こういうことを言っている。これだけ言っていても、なかなか人間は神さまのところへ来ない。神さまの方へ来たら、これはまた律法主義になってしまっている。前からずっと読んできたように、すぐに律法主義になる。御霊が来なかったら、もう律法主義になってしまって、「やったらいけない」とか、「やれ」とかいうことになる。本当に自然に、ここに小池辰雄の願いが、キリストから託された願いが、真情が吐露されています。こういう生き方を小池はしたんですよ。

それを我々は学んでいるわけです。そこまで小池の、何回も言いますが、十字架の受けとり方というのはもの凄く深いから、

「その深い十字架の受けとり方を我々は学んで行かないといけない」

ということです。僕は何べんも言いますよ、この『無者キリスト』を読むというのはそういう意味なんです。本当に深い深い小池の十字架の受けとり方、それがここをずっと読んで行ったら分かります。そういうことを小池から学びたいと思っております。本当に、

「人類は今、このキリストの愛を、キリストの霊を要する」

ということを最後に書いてくれています。

これで終わりたいと思います。ありがとうございました。